

瓶前國怡郡三雲村古器圖說

全

筑前國怡土郡三雲村所堀出古器圖考

福岡 青柳種信著

文政五年壬午二月二日 本州怡土郡三雲村の農長情四郎

の宅に南隣より南山路より農長抱の圃より掘り出

せり土餅と築むと地を掘ると三尺餘あり一銅劍を

掘り出せり一銅鐙とあり地中に植へ置ると又其側より一銅

鐙とあり其形状偏りて板の如く其形は小壺一口より土

器より銹薬を用て焼く物なれん覆ひて置る地中の土

内には木と埋る物あり其形は石様と下を掘りて大甕カ

二口その口とはまを合せし横臥しその其内は必人の尻を
とやまききとく衆人をして懼きとそりて堀よきや免て
右件物と云く郡廳を訴く其下ろる瓊や堀野と云
よりるをりやぐ堀よき見れを瓊徑二尺許は廿三余
二つとたのり程より瓊の腹と市二尺ありと繩繋ぎ
き搦カマヘと云くは瓊素焼物スヤキ其内は古鏡大十三五
面銅銚大小二口勾玉一管玉一つ玉六つは皆揃ひて
質は唐よりと云く多るかぐり中へ碎けし瓊や泥
の如し其内二つ金の有り形はいと矮かき紛江色を有

又鏡と重子との間毎、形扁く圓にして徑二寸八分中間穴
 有り穴の徑七分兩面と堊土シラツチを塗りたる也此物と挿めり半面
 の白き布にて霰紋有りけし之の形厚五分其縁ヘリと側ソバを見
 りてと堊土は此物の中心の館色にしては有り硝子ビイドロは
 此を硝子よ久々水土に蒸ムサむる表を白色に塗りたる
 亦も亦もく碎けし金かゝり此物に燒中、四月園毛鬚
 等のものあり、鏡と之の金をそと石擲の代りに用ゐるを昔
 あり園中より亦も此物見り其形ひとつとありども肉に毛鬚
 等もあらけしものありは他産土神佐々禮石神社の

近々をむり當其の祭奠の盛るる時のお普地る
なるといふ人もなきと云ふ事とけいひ難るるも葬
果との方近々むり西土に棺に鏡懸るるをわり
怡土國王の名古く彼國の史藉にありこれをよく西土と通
しと稍かの風俗を習ひてせしも知るべしと云ふ事
物と云西土の器やと皇國古物なり是を以て推分
いよと葬果の古く之は比明の瑛仁宝と云ふ事
七修續纂に見るも其後曰世之古鏡多出北地古墓人知
而實之未知墓出故也按漢書霍光傳光之喪賜東園溫明

服虔注以東園出鏡之所予恐温明鏡名也又按癸辛雜識云世
大歛後用鏡懸棺蓋以照屍取光明破暗之義據此二書則知鏡
在於墓其來已遠而取義亦明白也意其開一墓而得鏡不一似
古人送葬者皆贈之如今人之錦箱耳と有り此説よく有り

劍一口 長一尺七寸この内 銅製にして又柄も之に鑄造するなり 又巾
一尺三寸柄五寸

身は雙樋と 五寸 雙樋の中 三稜有り竹の節也又亦二處に

柄も之に三稜有り竹節の如きもの二處有り捉掬 ニギル
タヨリ 便守柄の頭

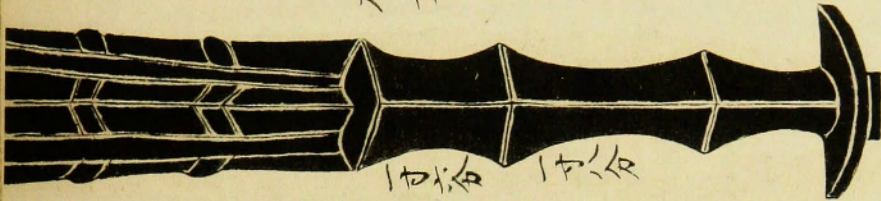
不蓋のやわゆる柄も貫る形を極く繁化巧妙之色澤を
潤澤有り又且土蝕一處有り之を削り鑄造するが如く

識
銅劔

黒紫色

中々た。

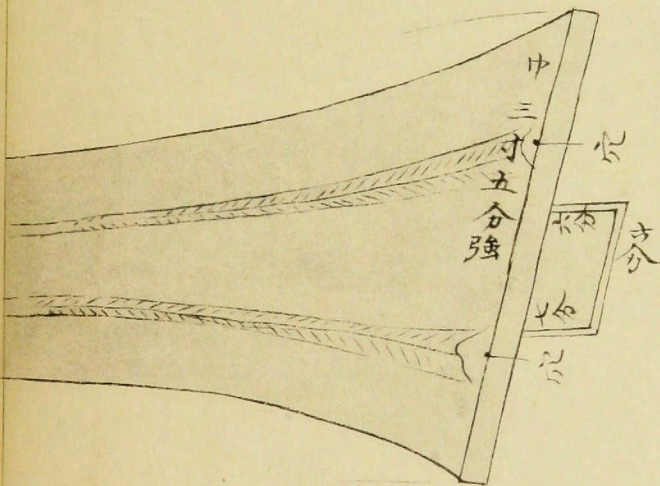
柄五寸



中々た

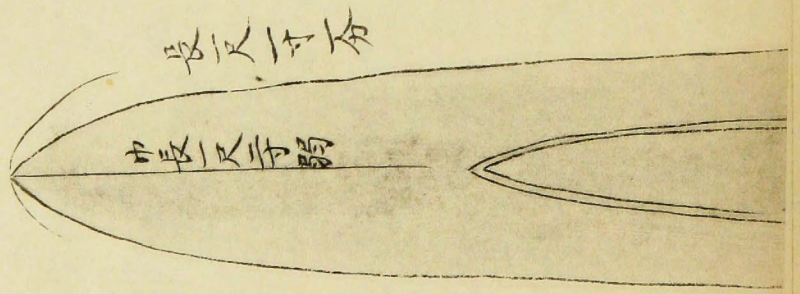
銅鐔

青緑色





中一寸三分



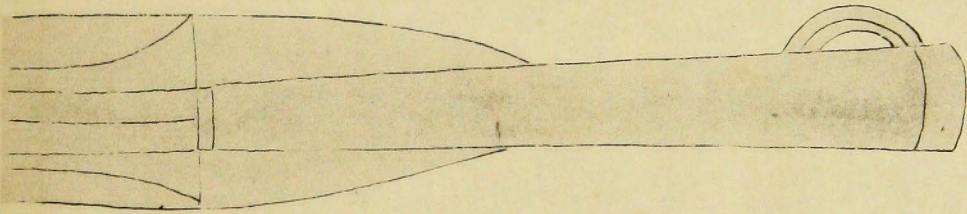
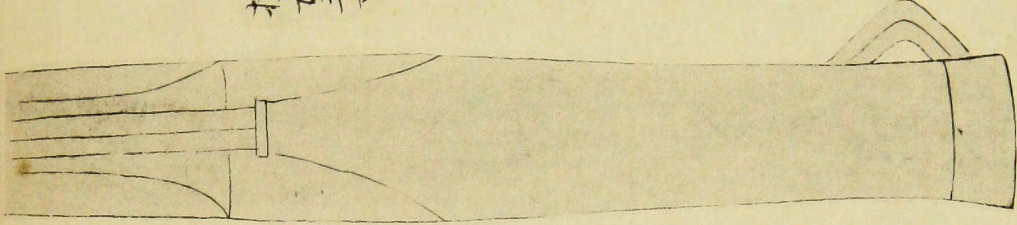
輟研録に官遊紀開云々古銅器に新古論云々辨古器則有謂
 歟識臘茶色朱砂陸真青綠井口之類云々臘茶色亦有差別三代
 及秦漢間器流傳世間歲月寢久其色微黃色而潤澤云々又曰
 器入土千年純青如鋪翠其色子後稍薄午後乘陰氣翠潤欲滴
 間有土蝕處或穿或剝並如蠟蒙白土或有斧痕則是偽也銅器墜
 水千年則純綠色而瑩如玉末及千年綠而不瑩云々傳世古則不曾
 入水土唯流傳人間色些褐而云々了るに以銀の土に入と久しけど
 其色青緑なる人乃至流傳るれや紫色光瑩ありは夢溪筆
 談といふ沈廬の類也 筆談云古劍有沈廬魚腦之名謂其湛然黑色也とり
 是鐵劍のときくことかかと云々考索の爲め成りあり

斯劍そのか皇朝は物々將漢製を詳と知し千々此の皇朝のいし刀
 劍に釘と法をとも同く西土も宮廟乘輿の飾或ハ闌楯の飾物
 節鉞戈矛盾弩機或は鈴刀等の類に釘と法をとも見ゆとハてし
 淨物たる一但中古を異國に製するも同くこれと法
 一とよまじし那河郡五十川村の清の神傳令く此物と思ふを
 千ととり又次と見ゆる鋒をハあ申法を近近年太宰府の
 市に^{ホリ}鑄かきしもの是と肉之儀と考ふるに神皇后三神に
 祇のひりらるる海西の法國に使驛を有しありと其まじし彼
 魏志にける伊觀國に有千餘戸世有王に郎使往來常所駐あり

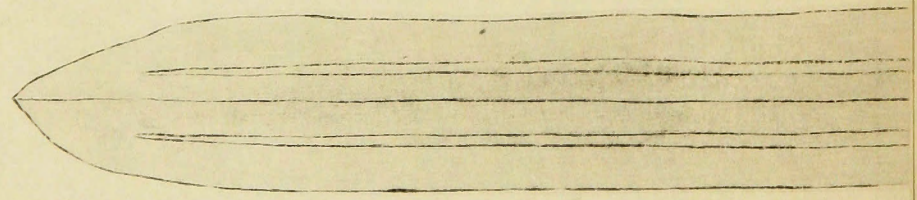
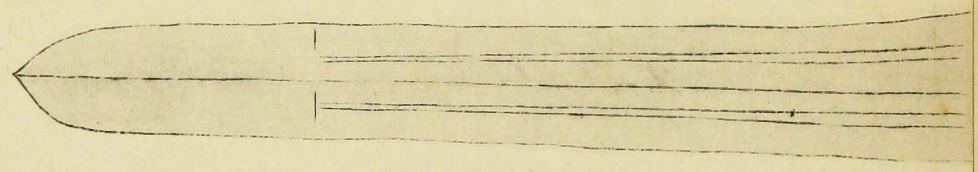
銅鉞

柄長五寸

鈕



惣長一尺七寸 鋒長一尺三寸



け三雲井原邊の石切跡を仰止縣美島の三幹を將來し物
らるもきくつが

銅鉞二口後小一柄のこゝ裂や異之即前圖の如くその状
ち付の袋鍔と云ふもの如く稜レキの根を直切りて平空虛に
口は待と切つる鋒ハ鯨尾と似り稜の左方ハ雙樋を二つ折
三段と分る銅色青緑の入土千年純青如鋪翠と云ふは鉞
の類ハ宮壽宮に任吉春日等當國の神社に神寶として扶桑畧記百
練抄云々此のころ安樂寺の聖方後と云ふ銅鉞と城布と云ふ
り、天明四年より川やるがうははるあるを片若と云ふは鉞造

サヤウハ鋒の容範と那河那丹の村とに生れしものなり其元

を異國の物とすくはるるまを偽ひて造り 予文政四年と遠望林
下上は村と一衆亦と石鋒

三切をえり其形をけり其國の如く偏しと板のど青石甚堅中葉の付所の山

中より兩邊に捨置ると云又近以典義國田河郡とくはめと捨置るよりすり因と

妙に鋼鋒を假仕の形をえり其形を自石鋒の

儀衛に推しと貴方華具を用ひしもの也

勾玉管玉 けい玉部 八真玉に似たりは神儀の古物を水晶

流璃瑠璃珊瑚馬腦ありり中其花形玉に似たりとすり

毛字偽物のを造る時とすり能き勾玉の形を造り其儀にて年

代を推し其を既と珠玉を錯をせり油に浸し其形を造り其儀

かじりの為り細智を推し造るものなり其形を造り其儀に造る

物々々々々々

延壽或と出雲国道の献
ものや吹玉をとり

又これに管玉といふもの

奇々々々

萬葉集
吹玉

竹玉といふものなり

竹玉といふものなり

五百箇御統玉といふものなり

田中一少とて堀巻あり魏志と倭国使の彼國と齋約とあり

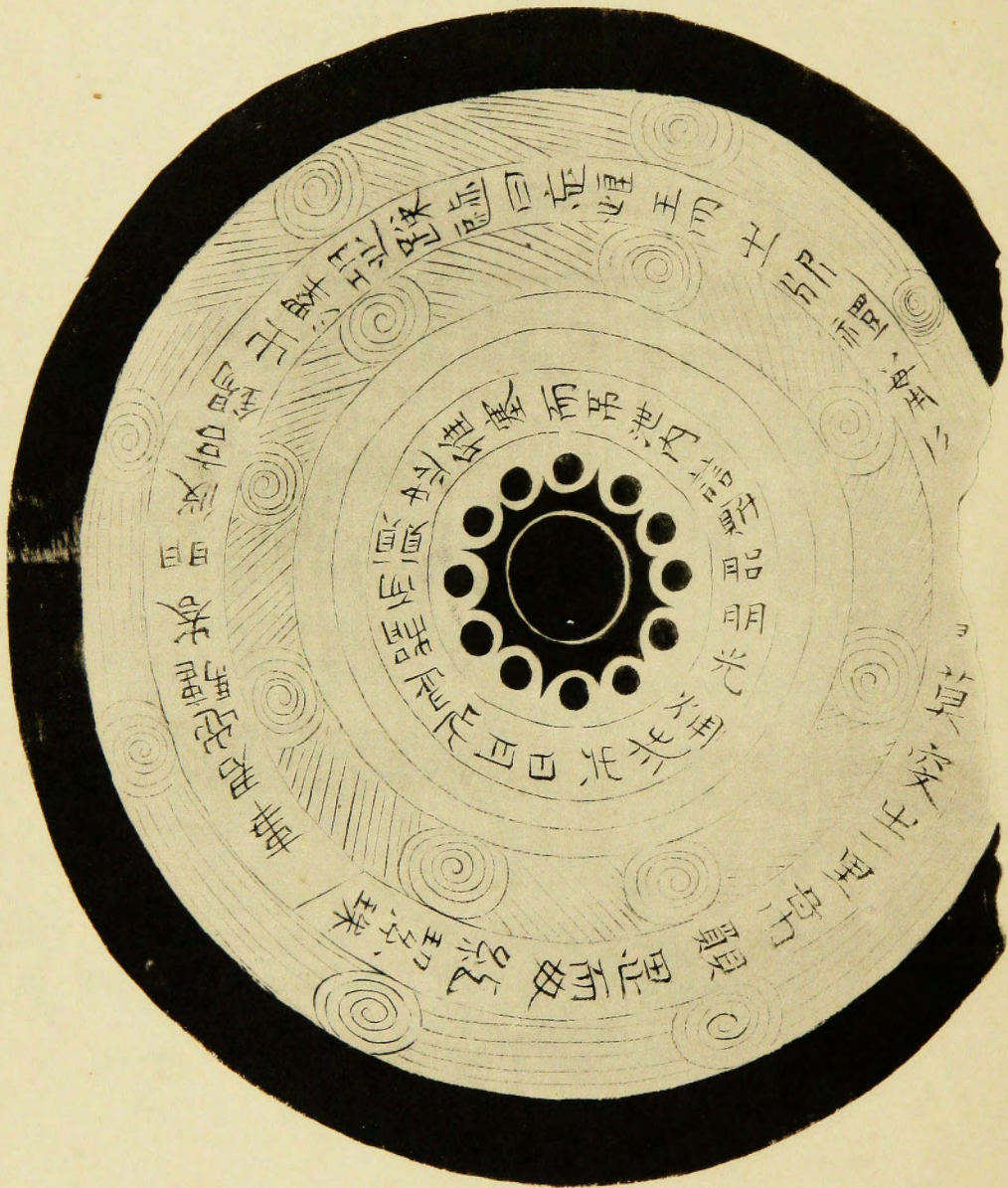
此中に白珠五千孔青大句珠二枚あり皆上り口を

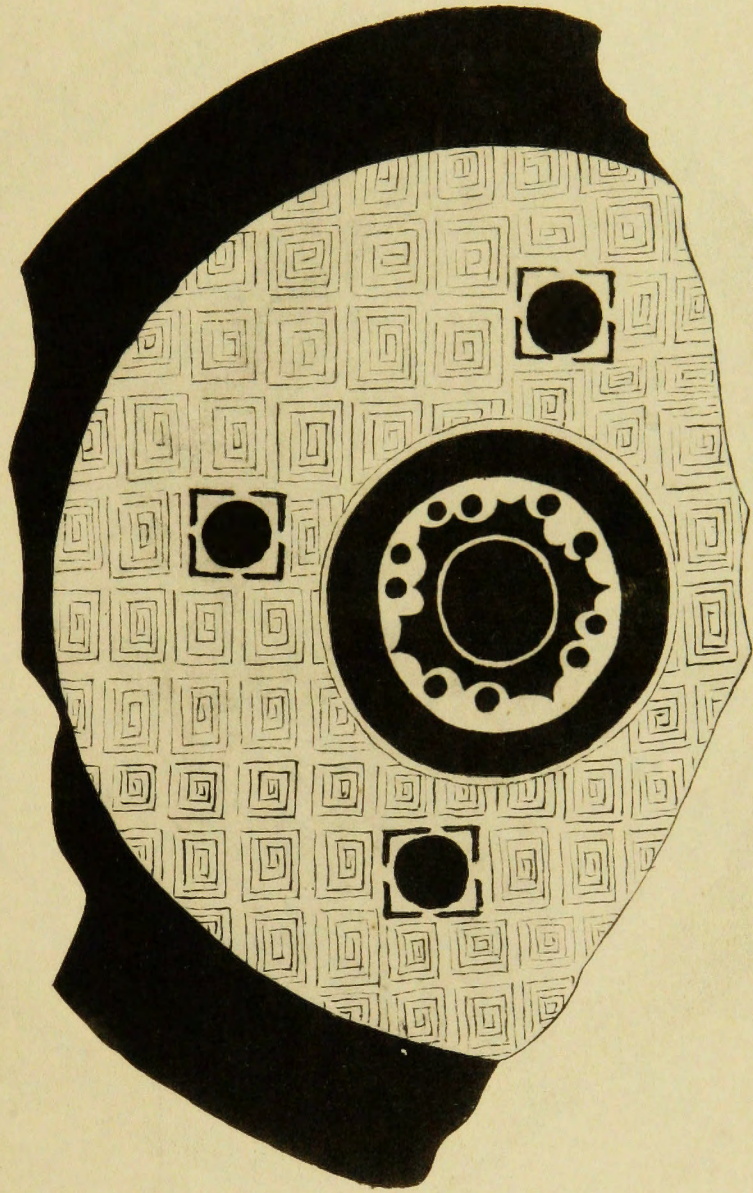
白銅鏡大小二十五面この内大なるもの徑九寸背紋あり 圓規三

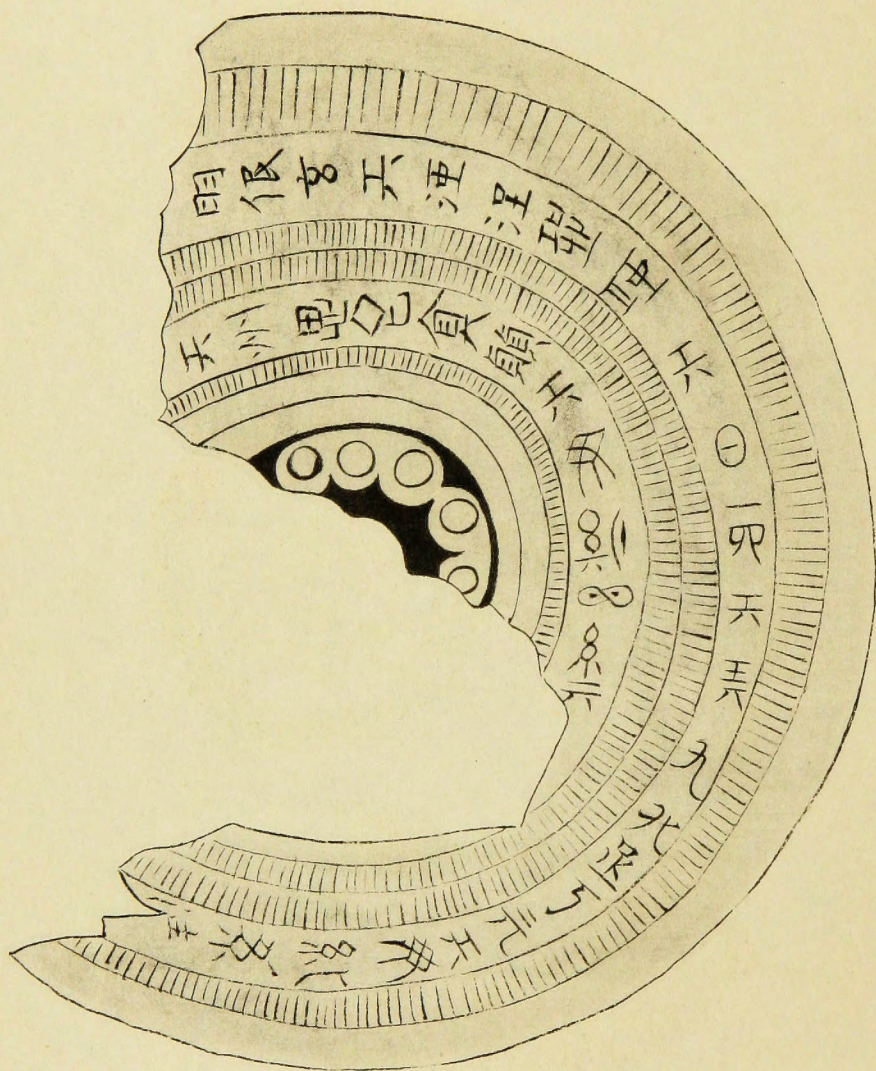
匣緑青一色青緑色と次ハ徑一寸三分この匣は緑青一拵

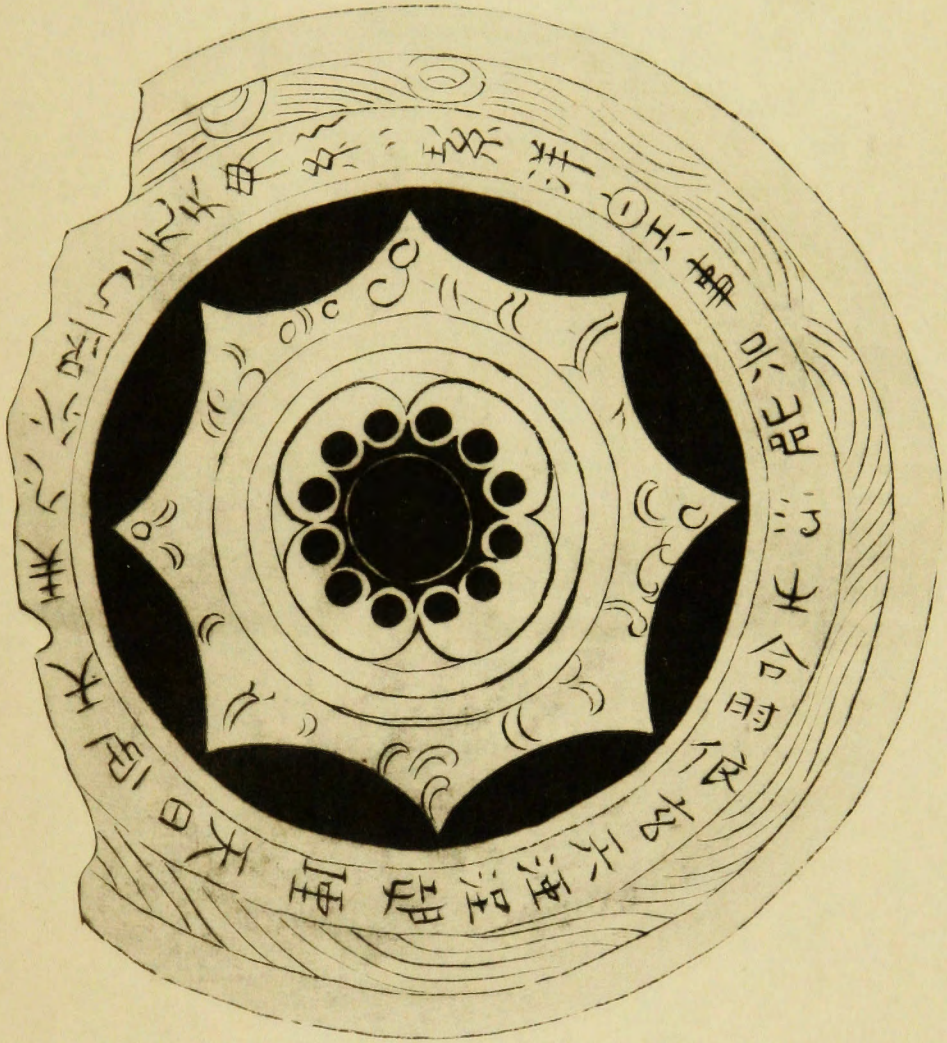
紋ありこの匣に乳紋のあり

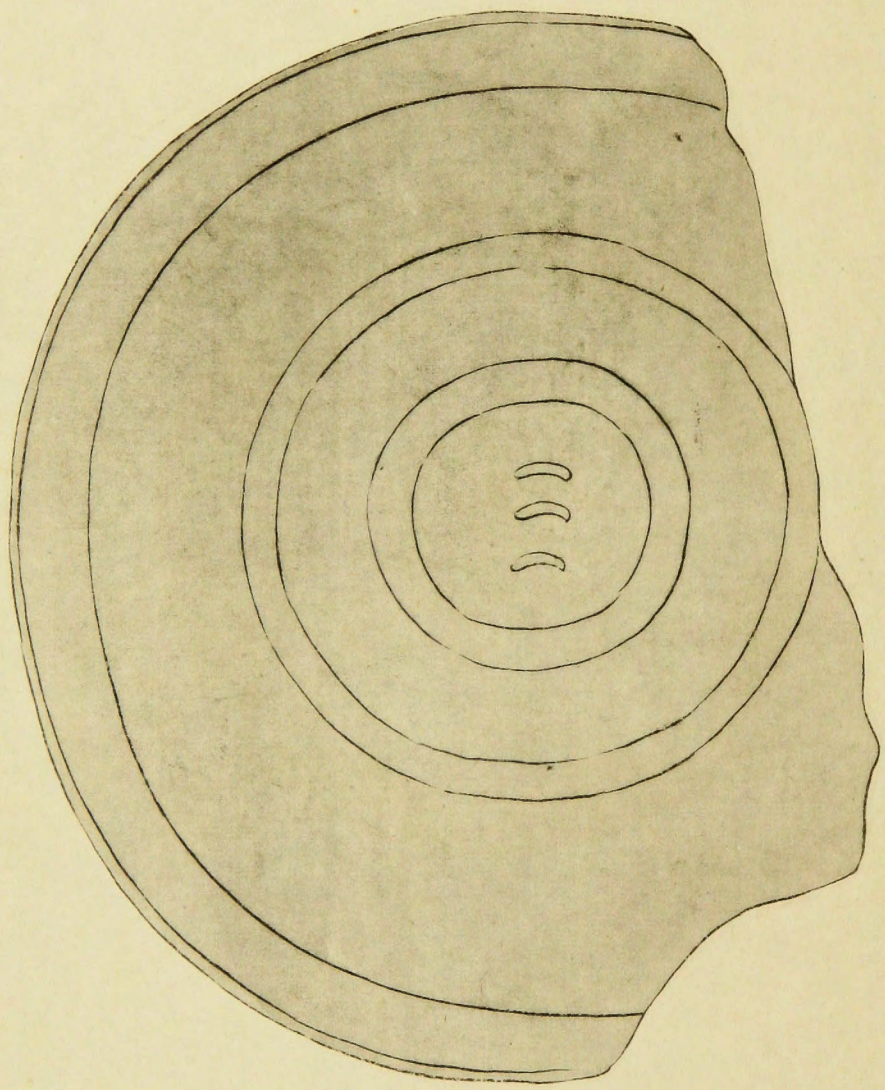
鏡







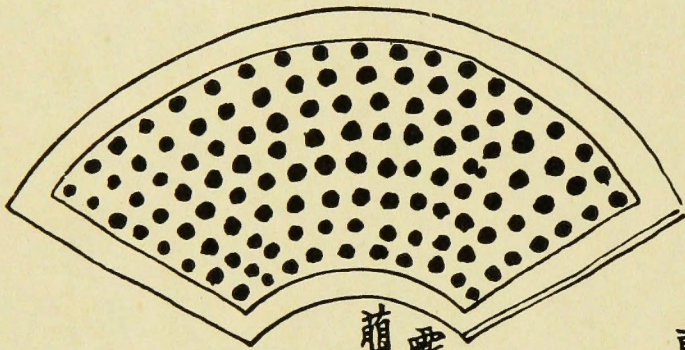




方座有り中臺六圍絡三匝七巾に紐有り右者の巾紐の繞り星
 紋八ヶの八星のりて八重の蓋雲紋のりて青翠の傍り白あり
 磨子とハ光瑩玉の巾一又徑身ありて上より巾指の圍
 圍七匝と身一圍を繞り紋あり巾二流孔浪滴の巾のりて三ハ
 識有り隸書凡四十字と徑或三分或四分書體漢隸に古壯
 第四圍中雲紋のりて雷紋のりて第五無紋有り
 才六ハ無紋才七文字廿三字書體隸に巾のりて何ハ其
 巾より一ハ巾の出入あり巾起り八圍を上りて巾の紐
 匝ハ星十二ありて巾のりて雲の巾のりて巾のりて可憐也
 趙帝鶴の

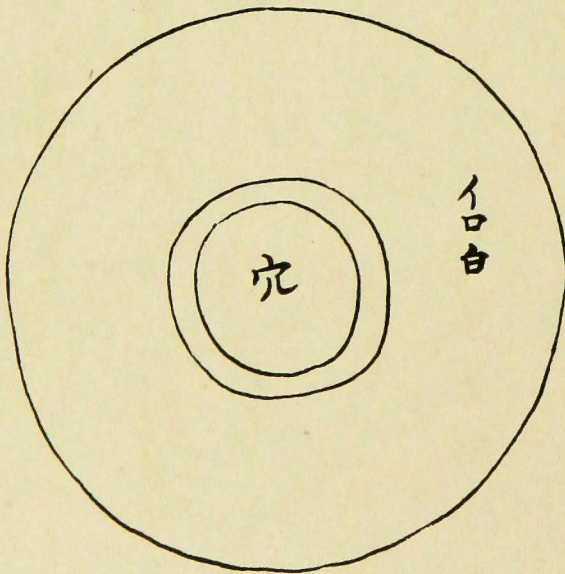
鏡の間とく、一孔を敷くをさしう

素
破片



素
破片

裏
全図



入口

穴

洞天録云所謂識文款文亦不同識乃篆字以紀功之漢以小篆隸書
 といふは其の後の世に流るるを唐人の好むを疑ふべし
 官游純用之款と識との分を辨るる所謂款識乃分二義款謂陰
 字是凹入者刻畫成之識謂陽字是提出者正如臨之与摹各
 自不同也又一面徑五寸三分純綠色而瑩如玉と云の鏡は
 其愛惜の厚くは銅をうらみず一古人銅器の扱はくは物と以て
 真の高とすべし其廿六七面はよく七層大慨上より續博
 物志云古先純銅作鏡者皆以錫雜之陶弘景曰李時珍云白銅出漢
 南以爐其石鍊為黃銅其色如金砥練為白銅雜錫為響銅又云

錫銅相和得水洗之極硬故鑄鏡用之と云々
 磨鏡藥 水銀シロ錫シロ志シロ和シロと用シロと云々
 水銀シロ錫シロ志シロ和シロと用シロと云々
 水銀シロ錫シロ志シロ和シロと用シロと云々
 光線新し磨らるし背文重圈の中は文字極ナ象體
 奇古不可讀才五圈の内に文字あり
 此紐形早紋字共々上た回一重に識るもの計二洗の
 甚難と徑字二面同才九分二面同才四
 十四面都合三十面之は中に才二圈の内雲紋の
 形あり文字あり書倅を上下同字多し唯一二思
 才五圈の内カウジ柁子割カウジの形あり八辨
 才五圈の内カウジ柁子割カウジの形あり八辨

圓何りて中老木瓜之形のもりて紐を内へて匣に装之。
上の好鏡と同一如此鏡凡廿二面、つれ光瑩如玉、其背面
とりに光線有り、精巧なり、洞天録云、古人作事精緻、工人預四民
之列、非若後世賤丈夫之事故、古器、歛必細如髮、勻者分曉、無
纖毫模糊、誠文之畫、宛如御丸、而不深峻、大小淺深如一、亦明淨分曉、
無纖毫模糊、此蓋用銅之精者、並無砂顆也、良工精妙、二也不各
工夫、非一朝一夕所為、三也、とら、は鏡のこころ、一恨らく、壺を
し、所、米鋤、辟、く、古、傳、片、と、なり、僅、く、金、内、二、三、面、の、或、云、
鐵網珊瑚、漢用、小篆隸書、三國用、隸書、と、は、既、述、録、の、如、く

又隸書也。字に増減あり。畫に少増減あり。月書云。道州民于秦
 陵塚得古鏡。背有菱花四朵。極精巧。其鏡面背用水銀。即磨
 鏡藥也。鏡色稍昏。而不黑。並有青綠色。及剝蝕處。此乃西漢
 時物。入土千年。其質並未變。此の鏡。正しく追へ。さうれを景初
 正始の物なり。吾悦縣王字此物なり。をぬき。梁瓦鑄成のもの。と
 鋤撃すれを破所多し。白銅をか破易し。此鏡の破所多きを所以
 なり。と。この鏡。據り。予友西原貞樹云。柳川屋の屋。昔年に
 戸に多く。宋板の三國志を見たり。魏志の倭傳に女王の請に因り
 船三艘と鏡を積り。既り。見たり。今世の三國志。六は。し。

史に予古鏡と名ひ癖ありゆゑ見し古家と名もあひ
 十に七八を異邦の物と神成りゆゑハ多クハ倭鏡なり世用は俗
 ありはを倭漢相成りしは船三艘之鏡を積り皇朝運來
 以ての必虚なりし去るは倭鏡の古鏡千尋の今ハ多ク
 傳りてちや古昔怡土國王其使の傳りて來りし時彼を齋
 米し送りて去り昔年志賀島を壻と名り委敷國王の印
 と相傳仲すと云ふべし

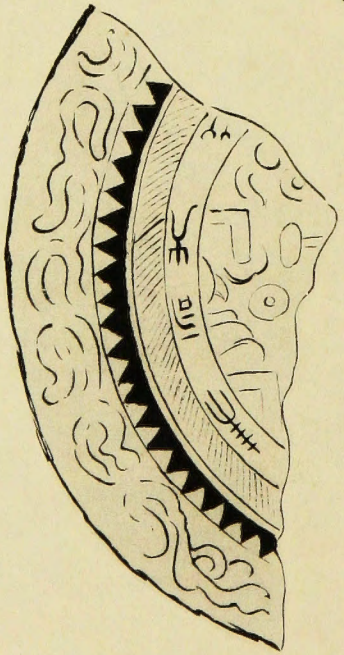
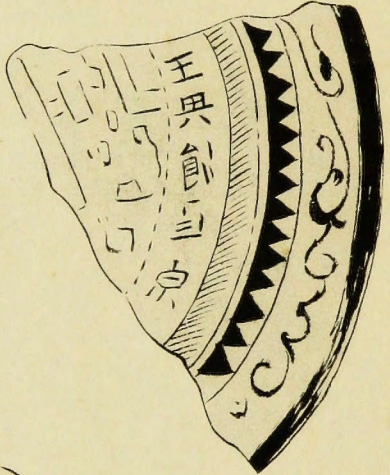
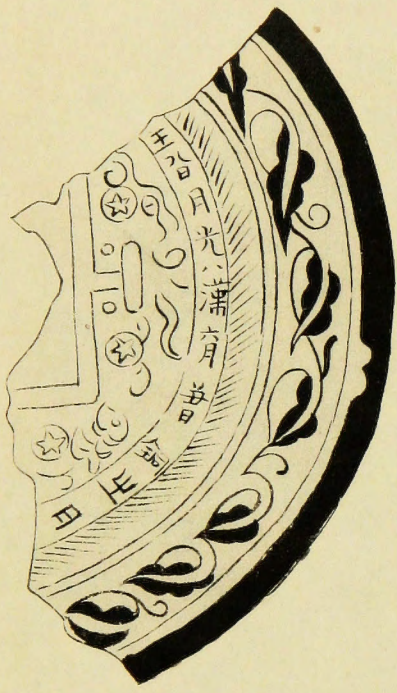
或云は、あは鏡の壻なりし時、諸人駭ぶと競あつたに
 以て、壻と名りて碎けて、後片兩手に裁り、都に献上

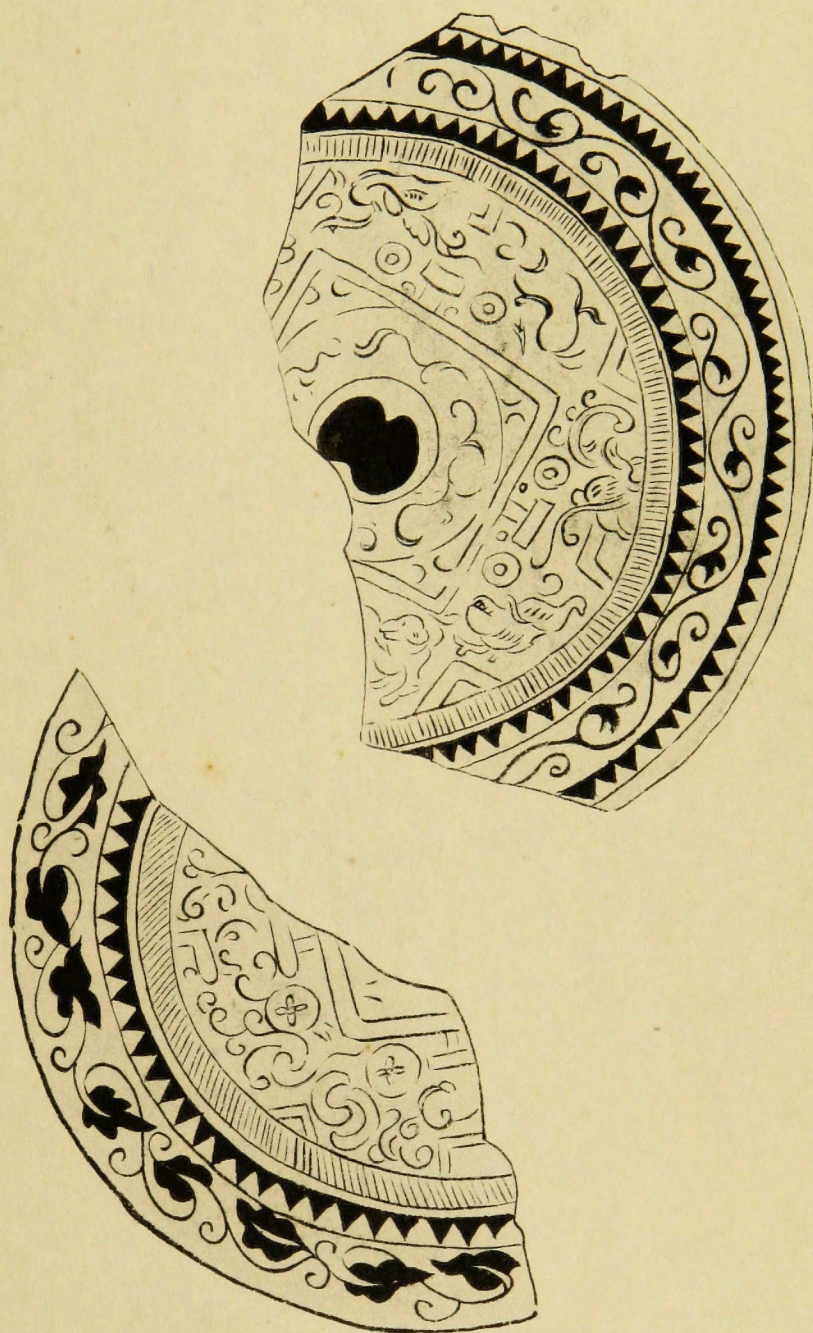
地を重り碎けりしとて土を重し一対の銅板柔輻
 ありし碎易し静くあそびたゞ墨を漸く硬固くせし
 一とて一村の流しに終り終りといふも若く去氣を
 蒸陶せしめ銅性の韌くかゝ所のありしとてぬが
 今尚くさくくといふ記しと墨厚し倍す家ののみ

二れをもちて天明年中に三雲村の隣に井原村とてなすなり
 古鏡を河内と堀河とともて其民次市といひ者造溝ヤリコヅ三雲とち
 といふ所を田代とてなり其夏旱しとて田のみ乏しかりといふ
 其溝の水を田を導んて捧ぎりて水口の寒くはて成り開くといふ

田海の舟を赤氷流はあはれむと云ふと壺をりうん一の重
ひのり其内古鏡數十枚又鎧の板のあき物と刀劔の
數も多し杉槓と状合とび鏡を破る數十斤と云ふ
八分と云ふと傍をり物と云ふと者どもよくに居るど
しと終る名ぬ其破斤のせむるも精巧緻密なるをハキ
と云ふと云ふも古形と背散れとハ別と其画ける畫に似
と畫に極む文字も極む鳥獸の數も鳥獸の何れを或は耳目
口鼻何れも鬼形に似たり何れも古更なるに龍蛇をものや又
を雲渦雷紋をいふと云ふかの夢溪筆談に古銅器を論して

同郡井原村所掘出古鏡圖





同上未詳何器



黄同飛塵をとりてその是より一又又より一と
 黒くしとくハ流特し字取の上と目一其後ハ銅
 州紫黒色に一光瑩をとり古特をとり三
 年古鏡三つあり是ハ一の鏡をとり一
 一之坊紋蔓草雲渦乳文ハ井原村の
 多一之甚古致何をいひても世を
 一之鏡をとり一之鏡面凹なれ人面あり一之鏡
 一之鏡面をとり一之鏡面をとり一之鏡面をとり

スセンジ

人面を食く小なる中に収め婦人爲とせし物なりと云ふ人
 も即ち考ふべきなりたゞその相するもの事かくは著し
 べき也人の物を用はれし心構ありしことおもひて道
 次第人の事多し漢書後とるなり其布に二道と稱する
 と事意と仰かりし其遇然するを以て事さ此の境
 況の強きと地物とをけしる事ありしなり
 其説曰古人鑄鑑大則平鑑小則凸凡鑑凹則照人面大
 凸則照人面小小鑑不能全觀人面故今微凸狀人面令小則
 鑑雖小而能全納人面仍復量鑑之大小増損高下常令人

与鑑大小相若此工之巧智後人不能造比得古鑑皆刮磨令平
此師曠所以傷知音也とくり此鑑を明を

皇朝の古鏡は多く、背に花鳥唐草等の画を畫く其形八葉
五葉の葉方々あり、一葉を神代鏡、二葉を延鏡といふは是れ
石鏡、神の鏡をいふは、此の鏡なり、一葉六椽なりと
七葉あり、方鏡あり、之れ古の方鏡なり、見たる湖州の識
りとの世間より下品なり、異國より、昔有人取亀甲、銀河
始而造鏡、其後以銅故鏡裏鑄亀甲也と云ふは、
龜甲を背につくると見たる皇朝の、中世の、
紐を龜形

に造る糖をこの今の世の陵に造るに古法より拾遺あり
伊波の寺といふ所なり

かみいせのりくくくたねのりくくく

わん

とて海のものむくくくくくの上をいんぐらけ

くく壻の紋なきかみくくの當因御笠郡竈門山神社に後三条院
の御時筑あも藤原地衝知は此雨のりく奉納のりく鏡り糸
徑一尺二寸二分無故なり今に神駱のりく雲の居るくく
ナ必雨降る其神流る常は秘くく半次新後古今集

瓶蓋のふたを固く付けた日々に照らす
雨の如くは雨の如くは雨の如くは雨の如くは

雨の如くは雨の如くは

前系物

雨の如くは雨の如くは雨の如くは雨の如くは
雨の如くは雨の如くは雨の如くは雨の如くは
雨の如くは雨の如くは雨の如くは雨の如くは

文政六年初秋